



寄付された食品、日用品を確認するフード&ライフドライブのスタッフ＝4日、倉敷市水島北幸町の「ひろばにじいろ」

埋もれた困窮家庭支援

県内の「子ども食堂」の運営者が「フード&ライフドライブ」を展開している。食品や日用品の寄付を募り、新型コロナウイルスの影響などで生活に困っている子育て家庭に無料で提供する支援事業だ。コロナ禍により食堂を休止した中で始めた試みに、運営者たちは「困難を抱えているながら、地域で埋もれていた家庭とのつながりができた」と手応えを感じている。

◇ (井上建吾)

今春の第1弾では岡山、倉敷(総社市)で寄付を受け付け、約7千点が集まった。行政や社会福祉協議会などの協力を得て支援対象の家庭にちらしを配布。SNS(会員制交流サイト)も活用し、110世帯から申し込みがあった。

「コロナで仕事を失った」「あす食べるものがない」。事務局の「子どもソーシャルワークセンターつばさ」(倉敷市)には切迫した声が寄せられた。代表理事の紀奈那さんは、一軒一軒訪問して支援品を届けた。

「まだ生きていいんだ

コロナ禍で県内「子ども食堂」運営者ら

と思えます」「ママにもサンタさんが来た」「つながれて良かった」。多くの感謝を受け現在、第2弾を進めている。笠岡市や県北部でも支援品を集め、7月下旬から200世帯に贈る計画だ。

「目指した形」

有志が無料・低額で食事を提供する子ども食堂は県内に40カ所程度あるとされ、大半は幅広い世代が自由に参加できる交流の場としている。対象を限定しないため、経済的困窮や孤立など困難な状況にある家庭が利用できていないのが運営者の悩みだった。

フード&ライフドライブ事業では、支援対象の家庭にアプローチした。紀さんは「困っていても言い出せない、情報が入らない家庭もある。待っているだけでなく、一歩踏み出すことでつながれた」と言う。

同事業に参加する「つばさこ食堂」(岡山市)は5、6月、独自に弁当も配布。4回で延べ約170世帯に提供

食品や日用品 寄付募り提供 新事業でつながり

し、同事業でつながった家庭にも届けることができた。運営者の杉本美緒さんは「子ども食堂の役割が広がったと思う。目指していた形に近づいた。新しく出会った人とも近づきあいのように接していきたい」と話す。

「居場所」に

コロナ禍での新たな試みは、各地に根付いてきた子ども食堂の可能性を示した。だが、労力や資金面で運営側の負担は大きい。第2弾は岡山ロータリークラブから200万円の寄付、SUNAGA Groupの岡山土地倉庫(岡山市)から支援品を保管する倉庫の無償提供もあり実施に踏み切れた。

子ども食堂の運営者らでつくる「こどもを主体とした地域づくりネットワークおかやま」の直島克樹代表(川崎医療福祉大講師)は「貧困対策の機能も担える子ども食堂は、あるだけで安心感につながる。その役割を多くの人に理解していただき、運営者を支える仕組みを構築したい」と考えている。

メモ フード&ライフドライブは「こどもを主体とした地域づくりネットワークおかやま」が主催。地域住民から寄せられた米、インスタント食品、菓子、調味料、洗剤、衛生用品などを子育て家庭に無料で提供する。問い合わせは事務局メール(o.kayama.koiren@gmail.com)。